



2021年4月館員おすすめの本



『夜明けのすべて』(瀬尾まいこ)

吉田 梨紗



PMS(月経前症候群)の美紗とパニック障害の後輩山添は、自分ではどうにもコントロールすることができない持病に悩んでいます。ある日彼のいつも目に付く行動が病気により引き起こされていることを知った美紗は、彼への見方が変わり、なんとか助けてあげたい気持ちから突拍子のない行動に出ます。

本人にしか分からない病気の辛さに寄り添う二人の姿がとても真つすぐで、時におせっかいと感ずることもありますが、よき理解者として病気とうまくつきあっていこうとする前向きな姿勢がうかがえます。周囲の人たちの優しさもあり、病気という重くなりがちな話を深刻にならず温かな気持ちで読むことができます。(水鈴社)

『春にして君を離れ』(アガサ・クリスティ)

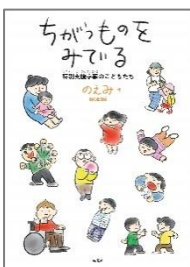
原 真由美

弁護士のよき夫と育ちの良い子ども達に囲まれ、理想の家庭を築いてきた主人公ジョンは、家族の幸福を第一に考え家事もおろそかにしません。「洗練された生き方……均整のとれた秩序だった生活」は、良き妻の証であると自負していました。けれど心が離れていく夫、反抗的な子ども達の態度に、実は家族を不幸にしていた張本人は自分だと気づいた時、絶望感に襲われます。かつて夫の夢を奪ったこと、彼が友人のレスリーを愛していたこと、子どもたちのことを何一つ理解していなかったことなど、本当はわかっていながら認められず、目を背けていたのです。離れていく家族の心を取り戻そうと追いつめる姿は切なく、ミステリーではないクリスティの魅力的な作品です。(早川書房)



『ちがうものをみている』(のえみ)

大久保美玲



特別支援教育に携わる著者のなにげない日常が漫画や詩で綴られています。一貫しているのは子どもに対する暖かい眼差し。子どもたちは皆天使のようで、どのページも心が和み忘れがたいですが、特に重度の知的障害を持つ女性と音楽で心が通じ合ったエピソードは何度読んでも胸が打たれます。

なかなか思い通りにならず、疲れ切ってしまう、ものごとを正面から受け止められない時もあるでしょう。しかし著者は、常に子どもの奥底にある美しい宝石の原石を見ようとしています。私たちもそんな視点を忘れず日々暮らしたいと強く願わずにはられません。子どもと関わる仕事の素晴らしさを改めて感じられる一冊です。(石風社)